

鶴屋南北怪談狂言集

日本戲曲全集

日本戲曲全集
第十一卷

鶴屋南北怪談狂言集

東京 春陽堂版

日本戯曲全集 第拾壹卷 目次

鶴屋南北怪談狂言集

彩入御伽草 (四幕) 一

皿屋敷、小幡小平次

阿國御前化粧鏡 (七幕) 七

牡丹燈籠、累

法懸松成田利劍 (二幕) 一〇三

地獄の與吉

東海道四谷怪談 (五幕) 一四七

お岩の亡霊

獨道中五十三驛

(五幕)

四七

岡崎の猫、龜山話

傳記、解説、年表

六五

初日の趣向は山城の木桶の里に馬はあれど歩行や裸足
で後生まゐりは木桶小平次が古沼の怪異

天竺徳兵衛が高砂染を

古手返しの新形に仇な

おつまを鰻裂きの八郎兵衛は

御ひいきの江戸前

後日の世界は播磨湯恨みてのみぞ過ぎしかと今宵逢瀬
を菊池の井は浅山鐵山が播州血屋敷死霊

彩入御伽草

第一番目二日替に奉入御覽候

表のカタリは、この狂言初演のものである。この狂言には天竺徳兵衛も交つてゐるし、二番目におつま八郎兵衛が附いてゐたので、カタリにもそれが含まれてゐる。左の凸版は、初演の棚下番附の一部で、本文に挿入した凸版は初演の繪本番附である。

本文に挿入した錦繪は、いづれも初演の折のものである。流石に初代豊國の筆は、まだこの時代には冴えてゐる。



彩入御伽草

序 幕

山城國蜷ヶ沼の場

役名——小幡小平次。小平次女房、おとわ。彌陀次郎時綱。馬士、多九郎。醫者、小佐保天南。菊地若君、月若丸。同乳人、敷浪。下郎、栗平。廻國修行者、廻便賣へ半禮一角照光。

役觸れ済むと、禪のツトメになり、東の方へ廻の口と浪板を出す。向うより月若、やつし笈指、巡禮姿敷浪、笈指、同じ巡禮姿にて札を掛け、菅笠を持ち、跡より栗平、旅奴、飛脚のこしらへ、刀の鞘へ狀細を附け、菅笠を持つて出て來り、花道にてオ、イ、巡禮々々、連れにならう。

敷浪 ハイ、それは有り難うござりまするが、御覽の通り私しどもは、幼いのを連れましての長旅、足弱連れ

でござりますれば、所詮お飛脚體のお道連れには、及びもない事。思召しは有り難うはござりまするが、サ、お先へお出でなされませいな。

栗平 ア、そもじは小さいのを連れて札打ちか。そいつは奇特な事だ。親の爲か、但し亭主の爲の巡禮か。しつかい平假名の三段目といふ思ひ附きだな。コレ、この飛脚も、そもじのやうな姐えに思はれたら、それこそ奴がじだらくや、岸打つ浪は三熊野の、那智のお山が藝子節、こいつはどうも堪えられぬ。

ト敷浪に抱きつく。

敷浪 ア、コレ、滅相な事さしやんすな。わたしやアノ若君……ア、イヤ、あの子を連れての西國巡禮、女子ぢやと思つて此てんがう。こなさんは道中にゐるや、護摩の灰とやらぢやの。

栗平 エ、埒もない。身共はそんな者ではないぞ。コレコレ、刀を差してゐるぞ。武士の御家來、侍ひぢやぞ。御主人は播州にて、浅山鐵山といふお方。仔細あつてこの山城の、小幡の里へ急用あつて、極く内々の御狀を持つて参つた者。決して胡亂な者ではない。コレ、この狀箱が慥かな證據。そんな者ぢやアないぞ。

ト鞘のまゝで狀箱を出して見せる。敷浪、思ひ入れあつて

敷浪 エ、そんなら、心底知れぬ鐵山どのゝこの狀箱、何か怪しき急ぎの密書。ちよつとわたし

ト狀箱を取る。栗平慌てゝ

栗平 ドツコイ、それを見られて堪るものか。とんだ女だ。

ト狀箱を取らうとする。

敷浪 イエ、どうあつても中の密書を

栗平 見せてはならぬワ。

ト拾ぜりふにて争ひ、立廻りのうち、誤つて狀箱を樋の口の流れへ打ち込む。

敷浪 ヤ、あの狀箱を

栗平 流れへぶち込んだか。サア、大事だ。

トうろくする。

敷浪 この間に早う、月若さま。

栗平 エ、われをやつては

ト追はうとして、樋の口を見て

エ、行かれぬ。

ト慌てゝあるうちに、敷浪は月若を連れて上手へ逃げ

て入る。栗平、ウロ／＼して

エ、女め、待ちやアがれ……と云つたところが、大事の狀はあの流れ。こいつはマア、大事だ。アレ、流れるワ。こいつは利上げをせざるまい。アレ、流れるワ。ソレ、流れるワ。

ト拾ぜりふにて、キヨロ／＼して川へ目を附け、これも幕の内へ入る。直ぐに双盤になる。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕。正面に辻堂、読らへの二重舞臺。所々に稻叢、松、榎の大樹、上の方に苦船を繋ぎ、舞臺前は水船、川べりに蘆の茂りたる道具、すべて山城の國、小幡の里、螢ヶ沼の景色。爰に馬士四人、敷浪、月若を取巻きある見得にて幕明く。

馬一 姐さん、馬を貸しませう。

皆々 馬を貸しませう。

敷浪 こりや、こなさん達は、今も云ふ通り、馬は借らいでも大事な程に、さう思うたもいなる。

馬二 コレサ、姐さん、見たところが巡禮の事だ。賃は廉くやりませう。その子を通して、乗らつしやりませ。

乗らつしやりませ。

馬三 さうだく。コレ、姐さん、この小幡の里は、馬を貸すのが所の習ひ。否でも應でも貸さにやアならねえよ。馬四 それとも借りるが否なれば、その連れの小さいのを

おいらへ酒代にくれて行きやれ。

馬一 その子はおいらが貰つたほどに、酒手と思つて皆々 くれて行かんせ。

敷浪 ハテ、こなさん達は、變つた事を云はんすが、なんで又この小さいのを

馬二 ハテ、お觸れのある菊池の類、月若丸、そんな者ではあるまいかと、駄賃馬から仕掛ける仕事。馬が否ならその餓鬼を

ト月若へかゝる。敷浪さへて、見事に立廻りあつて敷浪 この子に指でもさして見さんせ。女ながら免さぬぞえ。

馬一 エ、面倒な。引ッばらへ。皆々 合點だ。

トてんつゝになり、皆々月若丸へかゝる。敷浪、立廻るころへ、向うより天南、醫者の拵らへにて馬の手綱を曳き、駄賃馬の上に多九郎、馬士の拵らへにて、頗か

むりして横に乗り、薬箱を馬に附け、この模様にて出てくる。天南、馬を曳いて舞臺へ来る。皆々、敷浪を引ッ立てんとして、馬に蹴られて飛び退く。皆々、天南が顔を見て

馬一 エ、どうしやアがる。

馬二 馬を引き込んで勿ね廻らせるとは皆々 誰れだ。何といふ駄賃取りだ。

天南 なんだ、駄賃取りだ。コリヤヤイ、わいらは愚老を馬士と思ふか。イヤ、さう思はるゝも尤もかえ。併し、醫者と馬士とは、ちつと商賣の筋が違ふワ。愚老は小佐保天南といつて、生き薬師同然の敷醫者だが、聞いてくりやれ、この馬士の馬を借りて、薬箱を下荷にして、病家見舞ひに出かけたところ、この馬士が俄の靈亂。そこで駄賃を拂つた事なれば、爰から馬を歸すも残念と、直ぐにこの馬に馬士を乗せて、醫者が手綱を曳いてくるやつサ。なんと、馬士が馬に乗つて、醫者が馬を曳くとは、これでは築地へ歸られまい。

皆々 ア、馬で來たのは、多九郎だな。

多九 コレ、仲間の手合ひか。いま醫者どのが話しの通り、駄賃取りのこの多九郎、この頃の暑さに霍亂をし

たさうよ。現在醫者に口取らせ、乗つたわしは先刻から、おいどが痛くてならぬ。もう下りやせうく。

天南 ア、危ないく。抱き下ろしてやらう。

ト馬より多九郎を抱き下ろす。

多九 ヤレく、馬に乗るのも大儀なものだ。時にお醫者様、酒手を下さりませ。

天南 ア、駄賃を拂つたその上に、愚老は下りておぬしを乗せ、手綱を曳いたその代り、酒手を取るのか。

多九 ハテ、その代りには、脈を見てもらひますワ。コリヤ、脈を見ろく。

天南 ナニ、白酒賣りではあるまいし。コレ、足を見ろといふ地口だな。

多九 イヤハヤ、肝つぶし蠅の頭だ。脈を見るのは醫者のみやくだワ。

天南 ア、この男は、こちつける地口だな。ドリヤく。

ト拾ぜりふにて多九郎の脈を伺ひ

これは脈體をかんがみるところ、死脈拂ひましよ、みやく落しちや。

皆々 何を云はつしやる。

多九 時にてめえ達は、あの巡禮どのを捕まへて、何をワ

ツバサツバ云ふのだ。

馬一 ハテ、あの餓鬼めはお觸れのある

馬二 菊池の子忤、月若丸、さまよひ歩くと聞いたによつて

多九 そこでわいらが詮議せうといふのか。

皆々 そんなものよ。

多九 イヤ、わいらが詮議しようといふと又、わいらが俗性も詮議せにやならないぞ。

皆々 そりや、なぜく。

多九 ハテ、この間噂にも、播州に住む小坂部太郎といふもの、女子を連れて歩くとの事。もしやその手先の者であらうも知れぬ。てめえ達も、あの巡禮を通して行くといへば、否でも其方の身許も詮議せねばならぬ。さう思つて居やれ。

皆々 ア、そんならわいらを詮議して

多九 それが否なら、あの女中にいさくさは無いか。

皆々 サア、それは。

多九 いつそ、わいらを引ッ捕へて

天南 ドレ、醫者も手傳はうか。

ト兩人立ちかゝる。皆々驚ろき

馬一 ア、コレ、あの巡禮の詮議は、ありやア粗忽だく。

多九 そんなら、ほんこにする詮議ではないか。

馬二 オ、サ、ぶちッこでござるよ。

多九 ソレ、見やアがれ。

馬三 エ、いまくしい。いつそ、うぬをぶちッこに

ト割り木を持つて多九郎へ打つてかゝる。多九郎、その手を捕へ、割り木を引ッたくつて

多九 ソレ、ぶちッこだく。

ト馬士の三をした、かくらばせる。

馬四 ヤア、多九郎め、仲間の者を

皆々 ぶつたな。

多九 ぶつてもいゝワ。ぶちッこだく。

天南 おいらも仲間へ入らう。ソレ、ぶちッこだく。

ト馬士の一なくらばせる。皆々驚ろき

皆々 ぶちやアがつたな。

馬二 ハテ、不承しやれ。ぶちッこだく。

ト双盤になり、皆々捨てふにて立ちかゝるを、天南馬をくらばす。馬は刎れて薬箱を落し、大勢を刎れ倒し、馬士四人は馬に追はれて下座へ逃げて入る。

多九 大べら坊め。ハ、ハ、ハ。姐さん、見なさつたか。

この多九郎が来ては、この位なものサ。

敷浪 ハイ、お前がござんせすば、どのやうな無體を云はうも知れぬ。よい所へござんして、此やうな嬉しい事はござりませぬわいなア。

多九 さうでござらう。して、巡禮どのは、この小幡へは、

知る人でもあつてござつたかな。

敷浪 左様でござりまする。この小幡の在所にある、小平次といふ百姓を尋ねて、九州より、はるくくと参つた者でござりまする。

多九 ア、そんならアノ小平次を尋ねてござつたか。以前は九州菊地に住へ、馬添へ役のあの小平次、それを尋ねて足弱づれ、あの九州から山城三界へござるといふは、

いよく菊地の

敷浪 ア、モシ。

ト思ひ入れ。

多九 さぞ長旅は草臥れたでござらうが、尋ねさつしやる

小平次は、廻國に出て留守でござるよ。

敷浪 エ、そんなら折角尋ねた小平次は

多九 廻國に出ましたが、慥か今日この頃は、歸るといふ

噂でござる。

多九 廻國に出ましたが、慥か今日この頃は、歸るといふ噂でござる。

天南 尋ねてござるなら、この道筋を、小幡の里と聞いてござりませい。

敷浪 それは忝なうござりまする。サア、ソロ／＼と行きませうぞや。

月若 イヤ／＼、おりや草臥れた。コレ、敷浪。

多九 ヤア。

ト聞き咎める。

敷浪 ア、コレ……いま云はしやんした小幡の里へ。

多九 巡禮の女中。

敷浪 ハイ、忝なうござりまする。

ト双盤になり、敷浪、月若の手を引き、上手へ入る。

兩人残つて

多九 コレサ、天南、こなたに頼んで置いたあの毒の事は、

いゝかえ／＼。

天南 ハテ、人を助けるは少と不得手なれど、殺す事なら

丈夫に請け合ふ。砒霜石、斑猫に、青蜥蜴の陰干しまで、

打込んで調合した毒だもの、それを服むが最期の助、コ

ロリバツタリ、ヒリ／＼ヒリ。それにつけても、あの小

平次は、今日あたり歸るといふ事だが

多九 そりやアこなさんも知る通り、小平次が女房のおと

わは、以前は播州浅山の屋敷、鐵山さまの實の妹。この多九郎が、若黨奉公してゐた時、連れて逃げたあの女。それから二人とも、屋敷を構はれ馬士商賣。不仕合せが度重なり、相對づくの夫婦別れ。いま小平次が女房はおれの女房。今では鐵山どの、首尾も直り、通路もしてゐるが、廻國に出た小平次が、急に中歸りに歸るとの知らせ。内に置いては少つと面倒。そこで彼奴に毒をくらはせ、おツ殺す工面を、こなたに頼んだではないか。

天南 サア、おれもさう思ふから、毒も爰へ、コレ／＼、調合して持つて來た。

ト紙入れより毒の包みを出し

して、小平次を、ジメ／＼とやりさへすれば、跡へはこ

なたが乗り込むか。

多九 乗り込むとも／＼。跡はおとわの亭主は多九郎。一體おれの方が、初手からの色男だ。

天南 愚老が匙の毒がきゝ、小平次めをおツ殺せば、後腹

やめず貴様の女房。その仲人は小佐保天南。爰は所もこ

のしろや、こはだの鯨に馬はあれど、君を思へば徒歩や

裸足の代參り、と來りやどうでござい。

多九 何を云はつしやる。

「あゝと双盤になり、栗平、キヨロ」と流れへ目を附けながら出て来り

栗平 ヤア、こなたは多九郎どの。

多九 さう云ふは、鐵山さまの下部の栗平。蚤取り眼で何を探すのだ。

栗平 サア、聞かつしやい。大事が出来たり。……お旦那鐵山さまは先達で、義政公のお心に違ひ、所領莊園召し上げられ、淺山家斷絶と思ひの外、山名さまの推挙にて、武將宣下の儀式に用ゆる御土器、手造りに仕上げ差上げるは、お家柄の皿屋敷。それについて、妹御山の井さまへ火急の御狀、持参したこの下部。後の堤で女巡禮に出合ひ、一杯機嫌のじやくらから、持参の狀箱この流れへ取り落し、水に迫かれて蘆間の蔭、その行く先を見失ひました。こりやマア、とんだ事を仕出かしたわい。

多九 栗平、待ちやれ。女巡禮といふからは、ア、そんなら今の奴に違ひはあるまい。して又、狀の趣き、少しは聞いた事でもあるか。

栗平 成る程、聞かないでもござらぬて。菊池の家の重寶雌雄二つの龍の印とやら。

多九 雄龍の印は菊池の娘、小坂部姫に附け置き、捨て子になしたるを、大伴宗鑑、拾ひ取つて養育なし、即ち天竺徳公衛の手へ渡り、軍勢催促なす爲に、この多九郎が預かつて、コレ、人知れずこの沼へ。

トあたりを見廻し、沼の中より、石を附けたる魚籠を引き上げ、その中より赤地錦の袷紗に包みたる印を取り出し

まッこの如くに隠し置き、軍勢を狩り催ふす今この時。

天南 して又、片しの雌龍の印は。

多九 菊池が身寄り、彌陀次郎といふ者預かりしを、鐵山

どのが人知れず、奪ひ取つて隠せしを

栗平 何奴が盗みしやら、雌龍の印は館の内に、かいくれ見えませぬて。

多九 この多九郎も馬方風情で、この印を持参するは危ないもの。殊にこの程失ひし、彌陀次郎めが詮議とあれば、

矢ッ張り元のこの沼へ。

ト元の通り魚籠に入れて沈める。

天南 それでは氣の附く事はあるまい。

トこの時、向うにて百姓大勢「サア、ござれ」とと聲する。

栗平

ヤア、あの人聲は

ト三人向うを見て

多九

ヤア、向うへ来るは小平次め。

天南

堤の茶屋で毒の調査、

多九

必ずぬかるな。

天南

合點だ。

栗平

サア、ござりませ。

ト双盤になり、天南、蓆箱を抱へ、三人連れ立つて下

座へ入る。直ぐにてんつゝになり、向うより小平次、白

手甲、股引、白き單衣、鼠の帶、敷き蓆、草鞋、鉦

と撞木、藁にて束ねし蓆にて、世話六部の拵らへ。

百姓大勢、脚絆草鞋にて、劔劔などを持ち、一人は

きなる草刈り籠を擔ぎ、一人は小平次が笈を背負ひ、

ワヤ／＼云ひながら出て來り、直に舞臺へ來て

百一 ヤレ／＼、達者でめでたうござる。さぞ草臥れて

あらう。サア／＼、爰へ掛けて、休まつしやい。

ト絲立てを敷き

皆々 サア／＼、爰へ掛けさつしやりませ。

百二 コレ、小平次、大事の笈摺は、爰へ持つて來ましたぞや。

百三 留守の内も、跡に變りはござらぬ程に、案じぬがよ

い。して、どこまで廻つて戻らしやつたぞ。

小平 これはハヤ、どなたもよう僂しくして下さります。

わしも内を出たからは、六十六ヶ國を廻らずば、歸るま

いと思ひましたが、聞かつしやりませ、親仁どのを三日

續けて夢に見ました。そこで夢見は悪い、一旦中歸りに

歸つて、西國四國は別に立たうと、まづ東國を残らず廻

り、奥州から北國筋、コレ、聞かつしやりませ。夢見の

悪かつたは加賀の白山、場所が悪いだけ一倍氣になりま

した。ア、こんなケチな根性では、六十六部は合點の

ゆかぬものサ。それにこの頃は流行り風で、二三日この

方、この暑いのに心持ち悪く、寒氣がします。ア、ま

た寒くなつた。

百四 ア、それはどうでも旅疲れでござらう。

百五 イヤモウ、親を案じるは、そりや誠に人間の情のあ

るところでござるて。

百六 わしらも去年廻國に出ようかと、この山城を立つて、

大和河内を廻りましたが、後へ残した女房の事が心にか

かりまして、二ヶ國は半分廻つて歸りました。そこで

六十六部ではなうて、二分五厘ぢやわいの。

浪から何まで、
切な其方の詞、
モシ、
月若さま、

あの小平次に、お詞を遣はさります。

月若 コレ、小平次とやら、世に頼みなき月若、この上にも頼むぞや。

小平 エム、勿體ない。有り難いそのお詞。少しも早く私しが隠れ家へ。

ト立たうとして、ワナ／＼慄へ出し、思ひ入れあつてア、困つたものだ。風のせみかして、また寒氣がして來た。困つたものだ。

トわな／＼慄ふ。

敷浪 ア、そりや困つた事ぢやわいの。どうぞマア、その寒氣をとめる仕様はないかいなう。

小平 ア、コレ、寒くつてどうもなりませぬ。なんぞ爰らに肩へでも引ツかけてゐられさうな物があつたら、御覽じて下さりませ。

敷浪 成る程、なんぞ着やるやうな物が

ト二人してあたりを尋ね、小平次が敷いてゐる絨立を見附け

小平 ア、コレ、爰によい絨立がござりまする。これなりと着て居りませう。

敷浪 それで済む事なら、ドレ、手傳うてやりませう。

ト敷浪、絨立を取つて小平次に着せてやる。この時、多九郎、茶碗を持ち、天南、土瓶を提げて出てくる。このあたりより川の縁にて、いろ／＼の蟲の音する。多九 ヤレ／＼、小平次、達者で歸らしやつたか。めでたうござる。ア、女中は先刻の巡禮だの。

天南 いま村の衆に道で聞きましたが、あなたは病氣でござらぬか。

多九 定めし旅の疲れもあらうし、その様子を聞いたゆゑ、早速内にと思つたが、イヤ／＼、知らせたら親仁も内儀も案じようと、この天南さまを同道し、引き風を早速發散させる、煎藥を持つて來た。サア、立て續けに二三杯まあれ。ヤレ／＼、こなたは、よう息才で戻つたなう。

ト茶碗へ藥をついで出す。小平次取つて

小平 これは／＼、馬士の多九郎か。わしが留守の内は、何かと家内を世話でござらう。天南さまもお變りなうておめでたうござりまする。わしもまだ、歸る時分ではないが、親仁どのゝ事を案じて、中歸りに戻りましたが、病氣といふも當座の引き風、こりやハヤ、藥を忝なりござります。

天南 なんのお禮に及びませう。サア、立てつけて、服ま

つしやい〜。

ト二人して勤める。小平次、服まうとして、フト茶碗の中を見て、思ひ入れあつて

小平 時候あたりの引き風に、用ゆる薬は俵屋の、その振り出しに事變り、色合とても常ならず、殊に泡立つ様子といひ、どうやらこれは

ト思ひ入れあつて

ア、コレ、お前が折角の志しだが、この薬は、こりや服みますまい。

多九 そりやアなぜ、服まれない〜。

小平 ハテ、よく〜物を辨まへ見れば、山野の家と踏み出した廻國が、在所へ歸つたればこそ、近所の家の志しで、薬も煎じて下さるが、これが深山幽谷で、どんな大病やめばとて、誰れが薬をくれませう。出家に同じ廻國修行、國を出た日を忌日と定め、行きあたりバツタリに、死ぬは覺悟の六十六部、ナニ、薬には及びませぬ。誠に壽命は天道様任せ。南無阿彌陀佛々々々々……

サアこの薬は返します。忝なりござります。

ト茶碗を返す。

多九 これはしたり、小平次どの。こなたは正直な男では

あるぞ。それは薬の無い國へ行つた時の事だ。有る薬なら服むがいゝわな。

天南 薬の仕込みはしつかりだ。問屋の醫者が附いてゐる。いくらでも、服まつしやい〜。

小平 イ、ヤ、服みませぬ〜。

多九 ハテ、さう云はずとも

ト捨ぜりふにて三人、茶碗をあちこちして、前の流れへ茶碗を取落す。水草の蟲、音をとめる。

小平 ア、コレ、勿體ない、薬をこぼしたわいの。

敷浪 併し薬のこぼるゝを、病が早速平癒するとやら云ふ

からは、こりやめでたいわいの。

多九 ナニめでたいものか。折角持つて來た薬を、みんな

にしたわいえ。

天南 油一升こぼしたら、次郎どんの犬と、太郎どんの犬

とが、みんな嘗めてしまはうに、何をいつてもあの毒を

多九 ア、コレ……ハテ、この醫者は、云はずともの事を

ト思ひ入れ。小平次もこなしあつて

小平 今まで澤の水草に、音をなきつるゝ蟲の聲、一度に

その音をとめしも、取落したる一薬は、正しく毒薬。

多九 ヤア。